

貨幣の不思議と

人類はどこから来て、どこへ行くのだろうか？ こうした疑問を、生物進化学などの視点から解き明かそうとしている、長谷川真理子先生。やさしい語り口で書かれている長谷川先生の著書には、専門知識がない私たちでも「そうだったのか！」と納得できる、面白い事柄がたくさん紹介されています。本誌では、特にヒトという生物が持つ「生きる力」「学ぶ力」について、身近なテーマから書いていただきました。

ヒトは共同作業で生きてきた

前回までに、ヒトという生物の特徴として、相手の心を読み、相手の感情に共感し、外界と「私」と「あなた」との三項関係を認識できる能力があることを検討してきた。このような能力をもとに、ヒトは共同作業によって生きてきた。そして、このような能力があるからこそ、ヒトは物やサービスを交換することができるのである。

直立二足歩行する人類の祖先は、およそ700万年前に出現した。私たちが属する種であるホモ・サピエンスは、およそ14万年前に出現した。そして、およそ1万年前に農業と牧畜とが始まるまでずっと、人間は狩猟採集生活をしてきた。これは、周囲の自然にある食べ物をとることで毎日の食事を賄い、何も貯蔵せず、定住もしない暮らしである。人類の歴史の99%が、このような暮らしだったのだ。

およそ1万年前に農業と牧畜が始まるとともに、定住生活も始まる。周囲の自然の恵みを取るだけではなくて、

自分で食料を栽培、飼育するので、1カ所に暮らしを定め、貯蔵をするこ

ともできる。食糧供給が安定し、カロリー摂取が多くなれば、人口が増える。こうして文明が生まれ、都市が生まれた。

分業と専門の違い

この間もずっと、人々の暮らしは共同作業で支えられてきた。現代のような社会では、分業は当たり前だが、狩猟採集民の社会だつて、分業の社会である。共同作業と言つても、みんな同じことを共同で行うばかりではない。異なる仕事を分担してやれば、分業である。

しかし、現代社会の分業と、狩猟採集社会の分業では、少し意味合いが異なる。それは、狩猟採集社会では、分業はあつても、それほど専門化はしていないということだ。例えば、ある人々が食糧の採集に行っている間に、別の人々がキャンプに

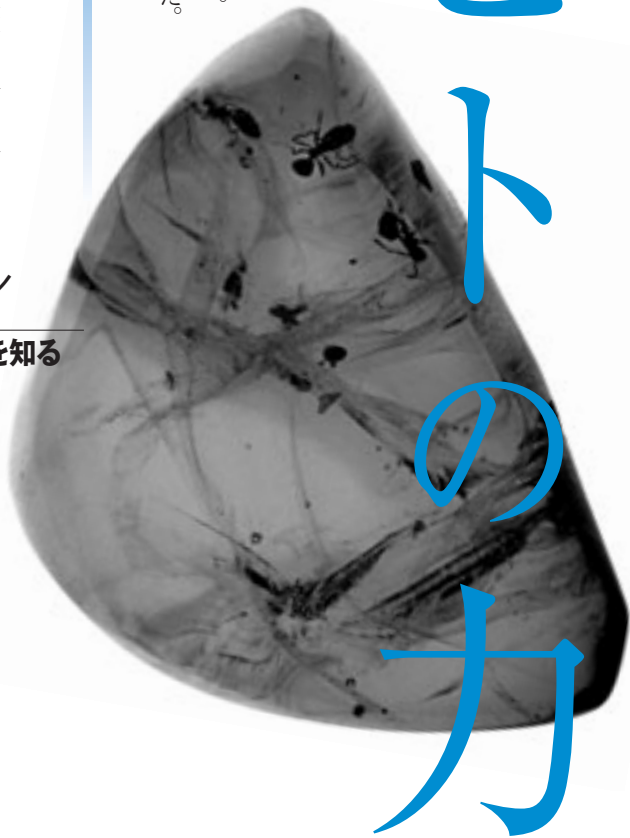
連載エッセイ

ヒトの生きる力、学ぶ力を知る

第4回
(最終回)

●総合研究大学院大学教授(進化生物学、行動生態学)
長谷川真理子

はせがわ まりこ
1952年東京都生まれ。東京大学理学部生物学科卒業。同大学院理学系研究科博士課程修了。東京大学理学部人類学教室助手、専修大学教授、米エール大学人類学部客員准教授、早稲田大学政経学部教授などを経て2006年から現職。2008年日本進化学会会長に就任。専門は、進化生物学、行動生態学。著書に『クジャクの雄はなぜ美しい?』『進化とは何だろうか』『雄と雌の数をめぐる不思議』など。



残つて子どもの世話をす、火を起こす、道具を修理する、と
いつことをする。これは、確かに分業だ。しかし、「子どもの
世話をす」「火を起こす」專業の人がいるわけ
はない。誰もがいろいろな仕事を時と場合によつてこなしてい
るが、結局のところ、誰もが何でもできるのである。

それが、定住生活の都市文明になると、分業だけではなく
て專業化が起きてきた。道具を作る専門家は、道具ばかり
を作つている。ほかの人は、その道具が作れない。その道具がほ
しいなら、その人の所へ行つてもらつてくる。その代わり、その
人は、自分で食糧を取りに行かなくても、みんなに支えても
らえただろう。こんな專業化した共同生活が成立するには、
人口が多くなければいけないので、これは都市文明以後の事
態である。古代エジプト文明などは、もう專業化がずいぶん
進んでいた。農夫、牧夫、漁師、粉引き職人、鍛冶屋、大工、書
記、兵隊など。

專業化した社会では、個人は、少ない数の専門作業しかで
きず、ほかの作業はできない。そこで、それぞれの専門化した
人々が生活を成り立たせていくには、共同社会の中での、み
んなのサービスの交換が必須となる。そこに貨幣というもの
が出てくると、また、社会の新しい段階が出現した。

貨幣の抽象性

貨幣は、物の価値を抽象的に表すものだ。「100円」と
いうのは、価値が同じならば何とでも交換することができ
る。パン一つでも、プラスチックの洗濯バサミでも、キャンデー
も、セロテープでも、何でもよい。物々交換やサービスの交換で

共同作業をしていたときには、いろいろな社会関係の中で交
渉し、希望の合う人同士を見つけ、都合をつけ合ったり、私的
な感情で物差しを動かしたりしていただろう。しかし、貨幣
経済の社会になると、話がずっと簡単になる。なぜなら、貨幣
は抽象的な価値を表しているからだ。100円払う人がほ
しい「物」と100円もらう人がほしい「物」は、まったく一
致していなくても構わない。全然違う欲求を持った2人が、
即座に100円を介して満足できる。

それでも、專業化と貨幣経済がそれほど進んでいない間
は、ほとんどの人々が一応は何でもできて、貨幣で買つてくる
ものは、それほど多くはなかった。しかし、分業と專業化が進
むと、多種多様な物やサービスが専門家から供給されるよ
うになり、それを得るために貨幣が流通する。こんなに專業
化が進むための必須条件は、さらなる人口の増加と都市化
であつたに違いない。

細分化、複雑化する社会

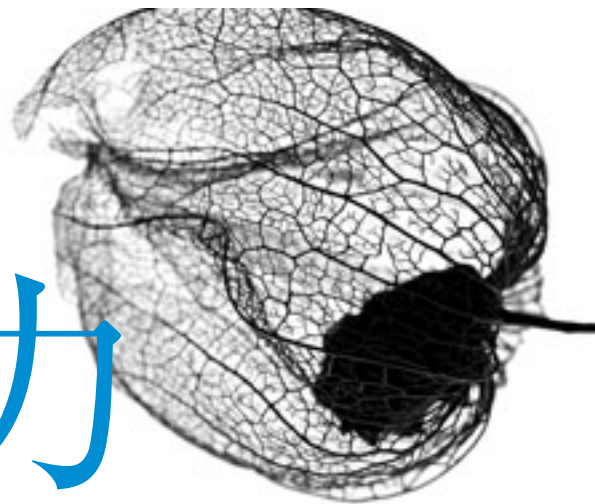
そこに、技術の発展がやつてくる。人々がほしいと思う物を
作り出す技術があると、ますます多様なものが商品として
出てくる。食糧も、衣類も、装飾品も、移動も、娯楽も、ニュー
スも、教育も、宗教も、事務仕事も、安全対策も。あらゆる
「必要」は商品となる。すると、それらすべてを生み出すため
に、それぞれ専門家が出現する。誰もが、一つの職業しかし
ない。ほかには何もできない。でも、お金という抽象的価値の
紙切れをもらつているから、それで何でも手に入れることがで
きる。

連載エッセイ

ヒトの生きる力、学ぶ力を知る

第4回
(最終回)

と議 思 と ヒトの力



こうして、家の中には家庭電気製品が充満し、家事の多くを自分でやらなくてよくなる。子どもの教育は学校という専門家に任せ、葬式は寺という専門家に任せればよい。人々の暮らしは、何千何万という特化した専門職業に分かれ、ほかの何千何万という専門職業の人が生み出したものをお金で手に入れて成り立つようになる。相変わらず、人間は緊密な共同作業の社会に住んでいるのだが、お金を稼ぐのが目先の目標なので、他人と共同作業で生きているという実感が薄くなる。お金さえあれば、誰の助けも借りずに生きていけると錯覚するようになる。

貨幣経済の発展と社会関係の希薄化

ここで私が問題にしたいのは、こうして高度に発達した貨幣経済の科学技術文明社会になるとともに、人々が生きていくために濃密な社会関係が必須となる状況が減ってきたということだ。狩猟採集社会では、食糧を取りに行くには、みんなで一緒に働かねばならなかった。つい一昔前まで、自分の特別な必要を満たすためには誰かに頼まねばならず、何かを教わるには他人に聞かねばならず、遊びたければ仲間を見つければならず、ニュースを知りたければ人とうわさ話をしなければならなかった。どこか遠くに行けば、誰かの所に泊めてもらわねばならなかった。よくも悪くも、人間は、社会関係のネットワークの中に入っていないければ、文字通り、生きられなかった。

それが、今では、コンビニで食糧を、インターネットであらゆる知識やニュースを手に入れ、ゲーム機で一人で遊ぶことがで

きる。お金さえあれば、一つの仕事があれば、自分ではあと何もできなくても、ミナムの人付き合いがなくても、生きていける。お金さえあれば、職場でも仕事の細分化が進み、ある一つのことに特化する。電話ではなくてメールが普及する。ますます、濃密な社会関係は必要なくなる。

お金というものは、抽象的で万能だ。ありとあらゆる欲求がすべて「商品」として存在し、社会関係などなくても生きていける状態を作り出したのが、科学技術文明ではないだろうか？ もちろん、人間は本来、他者とのコミュニケーションがほしいものだ。社会的なつながりを欲するものだ。だから、今でも人々はいろいろなところに社会関係を求め、コミュニケーションがなければ不幸に感じる。しかし、現代社会では、生きていくために社会関係が必須である度合いは、昔よりもずっと少なくなつた。一方、現代社会は、そんな社会関係のネットワークから外れ、お金だけを介してしか社会とつながっていないという状態の人々も生み出した。

人間疎外、生活の空洞化、社会関係の希薄化、地域コミュニティの崩壊、社会的コミュニケーションの不足といった問題は、あらゆる個別の欲求をお金で提供できるように仕向けてきた、この文明の、当然の行き着くところなのであると思う。「私」と「あなた」と「外界」の三項関係を認識し、他者の心に共感し、物を交換し、共同作業をすることができると人間の特徴である。その行き着くところが共同社会の崩壊であつてはならないはずなのである。そのための知恵を出す時期が来たのではないだろうか。

不の貨幣

